



ロヨラとの出会い

人はだれもがいろいろな出会いを体験する。その中の一つの出会いが人生を決定づけることがある。

サビエルとロヨラの出会いはまさにそんなものだったのだろう。それほど大きなものではないが、自分の過去

を振り返ってみても、たくさんのお出会いがあり、中には駆け足で通り過ぎ、折角の出会いを無駄にしたこともある。人生は人との出会いをどう生かしたかによって大きく変わる。



イエズス会を創設したイグナチオ・ロヨラ

よって大きく変わる。フランシスコ・サビエルの名前も知っていないが、イグナチオ・ロヨラの名前も知らない人が多いかもしれない。今回、巡礼で二人が

生まれたスペインのサビエル城とロヨラ城を訪ねた。

城で生まれたということである。二人ともバスク地方の貴族の出身である。

ロヨラは一四九一年生まれ、サビエルより十五歳年上である。サビエルは六人兄弟の末っ子。ロヨラも十三人兄弟の末っ子である。

バスクを挟んでスペインとフランスが戦争になり、ロヨラはスペイン側の騎士として大活躍するが、足に重傷を負って戦場を離れる。

騎士として手柄をたてることを夢見ていたが、療養中、手元にあったのは聖書や聖人伝ばかり。仕方なく読むうちに、騎士としてでなく神への奉獻生活を送る決心をする。

ちょうどこのころ、ルターが盛んになり、ロヨラはそれに対する反宗教改革の旗手として活躍することに

族の生活を捨て、物乞いをしてながら厳しい祈りの生活の中から体験した「霊操」はなかなか理解されず、何度も宗教裁判にかけられる。そして神学的な問題について他人に教えることを禁止された。

ちょうど基本的な神学の勉強の必要性を感じていたロヨラはパリ大学で勉強することに

なる。そこで同じ大学生としてフランシスコ・サビエルと同じ寮で生活することになる。

ロヨラはエリートコースを歩むサビエルに対し、キリストの言葉を引用しながら「人間の欲望のままに世界を手に入れても、清らかな魂を失ったら何の得があるか」と何度もさとしたという。

次第にロヨラの影響を受け、ロヨラの霊操を体験する中で、サビエルもロヨラが騎士道から神への奉獻生活へ回心したようにロヨラと行動をと

ロヨラの生まれたロヨラ城



もにする。

そして一五三四年、ロヨラ四十三歳、サビエル二十八歳の時、七人の同志とともに「イエズス会」を創立したのである。

もし、この二人の出会いがなければ、また出合いを大切にしてなかつたら、今日のカトリック教会、いや世界の歴史も変わっていたであろう。サビエルは年上の同志、ロヨラを「魂の父」として生涯、尊敬し続けた。

そして三十五歳の時、インドへの布教の旅に出、四十六歳で生涯を終えるまで一度もロヨラと会うことはなかった。なおロヨラは初代イエズス会総長として活躍し、六十五歳で帰天した。何とすごい出会いだろうか。今も二人を超えろ活躍しているが、それにしても「魂」、人の「いのち」が軽んじられる今の世界を、二人は天国からどう見ているのだろうか。

（元山口放送取締役ラジオ局長）